



連載

ビブリオ・トーク
—私のオススメ—

… 畑田裕二 (東京大学大学院学際情報学府)

文学効能事典

あなたの悩みに効く小説

エラ・バーサド, スーザン・エルダキン 著, 金原瑞人, 石田文子 訳
フィルムアート社 (2017), 424p., 2,000 円+税, ISBN: 978-4-8459-1620-7

とある診察室にて

こんにちは! どこか具合が悪いんですか? なるほど, 思春期で悩んでいるんですね. それでは J・D・サリンジャー (Jerome David Salinger) の『キャッチャー・イン・ザ・ライ』をお読みください. 次の方どうぞ. どうされましたか? ああ, それは花粉症ですね. ジュール・ヴェルヌ (Jules Gabriel Verne) の『海底二万里』を処方しておきます. どうかお大事に.

ビブリオセラピー

ビブリオセラピーは, 人に書物を処方する療法です. 日本では「読書療法」などと訳されます. 神経症などの治療という文脈で語られるのが一般的ですが, 本書ではもう少し緩く, 「心身の不調や人生の悩みに対して適切な小説を処方すること」と定義しています. 本書は, さまざまな症例に対して, それらに「効く」小説とその理由を紹介している事典です. 冒頭で紹介した 2 冊は, 実際に本書の中で処方されているもの.

本書の面白いところは, 本当に効きそうだと思うものだけでなく, 作者の遊び心からこぼれ落ちた, 冗談としか思えないような「薬」も並んでいるところです. 『キャッチャー・イン・ザ・ライ』については, 解説がなくとも効きそうな感じがします. ほかにたとえば, 飛行機がこわいときはサン＝テグジュペリ (Antoine Marie Jean-Baptiste Roger de Saint-Exupéry) の『夜間飛行』を読むと良いそうです. ファビアン (登場人物) が暴風の中で生死をかけて行った郵便飛行に比べたら, 現代の空の旅は

安全だから安心しろ, というわけですね. 作者のサン＝テグジュペリが飛行中に行方不明になったときり帰ってこなかったことに目を瞑れば, 確かに不安は軽減できそうです.

『海底二万里』が花粉症に効く?

他方, 花粉症に『海底二万里』が処方されているのは, 次のような「論理」でした. 花粉症にかかる → 目はかゆく鼻水が出て呼吸もしにくい → 冷たく澄みきった湖かどこか, 花粉のない場所へ飛び込みたくなる → 潜水艦で海の底へ行ければなおいい → 『海底二万里』を読んでネモ船長 (登場人物) の水中王国へ逃げよう! なるほど, 二万理とは言わないまでも, 一理くらいは……あるのか?

そもそも処方箋の内容以前に, 取り上げている疾患もバラエティに富んでいます. 無職のとき (村上春樹『ねじまき島クロニクル』), 恋した相手が尼僧でもあきらめきれないとき (マイケル・オンダーチェ (Michael Ondaatje) 『ライオンの皮をまもって』), 悪魔に魂を売り渡したくなったとき (トーマス・マン (Paul Thomas Mann) 『ファウスト博士』) などなど……. ちなみに, 読書に関する悩み (家事が忙しくて集中できないなど) に真面目に答える「実用的」なページもあります.

この本は, 単に「症例—処方箋」の対が羅列された事典である以上に, 読み物として面白いのです. 創発という言葉がちょっと似合う. 人が紡いだ物語が, 人の創造性もたらす独特の切り口で紹介されています. その魅力の一端は, どこか本気ではないような, 少なくとも, 科学的な厳密さでもって

読書療法を実践していない部分にあるかもしれません。どこまで本気で、どこまで冗談なのか分からない。しかしそれでいて、「それでも（適当でも）良いか」と笑わせてくれる愛嬌を持ち合わせている。

取捨選択のバランス感覚

僕はこの本を手にとったとき、その疾患—処方箋の独特な結び付け方に、えも言われぬ人間らしさを感じたのでした。普遍的なものをおさえつつも、要所所で遊び心を見せる疾患のラインナップ。それに対して、乱数的にすら見えるけれどどこかで説得力が漂う発想の処方箋。この絶妙な情報の取捨選択は、人間ならではの感じがします。

自然科学的な世界観では、『海底二万里』を読んでも花粉症は治りません。字義通り症状緩和のために処方するなら、「花粉が辛いなら、花粉の無い水中へ行けば良い。ならば海に潜る小説を読もう」というのはいささか荒唐無稽です。「ならば」が特に意味不明ですよ。しかし一方で、こうしたダイナミックなジャンプを伴う発想は、言葉を組み合わせで物語を紡ぐことのできる人間に与えられた究極の自由というか、そうしたクリエイティブな発想ができるという「喜び」は、人に与えられた特権なのかと思います。そう言えば、僕の好きな哲学者の小林康夫先生は、「人間とは何か？」という問いに対して「人間とは、『人間とは何か？』と問うことをやめない存在」と答えていました。

人間にしか編めない情報とは

情報が溢れ返る現代。過去の行動からアルゴリズムによって統計的に算出された「おすすめ」が、所狭しと僕らの体験を埋めるようになりました。また自然言語処理の発達は、人工知能にニュース記事や小説を執筆する能力をもたらしつつあります。思わず人とコンピュータの二項対立のように描写してしまいましたが、もちろんそんな単純ではなく、テクノロジーによる人間拡張など、多様な関係が生まれ

ています。社会や文化、産業や政治経済など、人類を取り巻くさまざまが、光速で行き交う「情報」によって今まさにラディカルに転換している最中です。そんな時代に我々は、人間として、どのような情報を選び、どのようなやり方で編み上げるべきでしょうか？ そんな問いが本書から思い浮かぶのです。そしてその問いはそのまま、この会誌へと突き刺さったりもします。会誌『情報処理』がわざわざこの紙の1冊に束ねる情報、人が人に対して編み上げる情報はどうあるべきなのか。こうした問題に対しては、正答というより、問い続けるという応答が求められるのかもしれません。

「AIにはできない、人間にしかできないことは何か」という問いに対して、本会誌の編集長である稲見昌彦先生はかつて「何か面白いものを見つけ、それで目的なく遊ぶこと」と語っていました。人間にはまだまだ「遊ばなければいけない」仕事は山積みです（やったー！）。チューリングマシンに端を発している現在の計算機は、計算能力において明らかに人の脳を凌駕しています。けれども、計算は脳の持つ能力の一部でしかありません。本稿で見た通り、言葉は人類が紀元前から持っている強力な能力（あるいは宿命？）です。たとえば言葉遊びのような偶然的な情報に魅力が宿ることがあります。そうしたドキドキする情報は人間の凝り固まった思考様式を揺らし、そうして揺れたところからまた、人間にしか語れないような情報が出てくることもあるでしょう。本書はそういった1つの可能性を垣間見ることが出来ます。

ちなみに「やるべきことを先送りにしてしまう」人には、カズオ・イシグロの『日の名残り』が処方されていましたが、が、まだ本棚に眠ったままです。この原稿の締切を落とす前に、ちゃんと服用すればよかったです……。

(2019年6月10日受付)

畑田裕二（学生会員） yuno.lv3@gmail.com
東京大学大学院 学際情報学府 廣瀬・葛岡・鳴海研究室 修士2年。